

国際高等研究所 国際シンポジウム

誤解と創造性——19世紀日本の翻訳の問題

組織委員長開会挨拶

中 川 久 定

「誤解と創造性——19世紀日本の翻訳の問題」という総題を掲げた国際高等研究所主催の国際シンポジウムが、これだけ多くの発表者、討論者、一般聴衆の方々のご参加をえて、東山山麓のこの都ホテルで、これから三日間にわたって開催できるはこびになりました。皆さま方と一緒に心から喜びたいと思います。

発表者の総数は19名ですが、開催国日本以外に、アジア、欧米からもご協力をえることができました。発表者の多様な広がりと同時に、扱われる問題もまた多岐にわたっております。——翻訳をめぐる原理的な問題、日本の明治時代、あるいは広くその前後を含めた時期における翻訳の諸相、同時期の韓国における翻訳の問題、科学技術文献、思想書、詩など、多領域に見いだされる「誤解と創造性」の問題、等々であります。

これから私たちは、翻訳の問題を組上に載せるのでありますが、それを原文に対する「誤解」という角度から、しかもその「誤解」をただ単に否定的価値をもつものとしてではなく、逆に積極的意味をもちうるものとして、すなわち「創造性」の源として検討してみたいのであります。

ご参加いただいております発表者の方々は、皆さまいずれも翻訳の問題について、常々深い関心をおもちの研究者ばかりであり、そのうちのいく人かの方々のご著書からは、日頃私も沢山のことを学ばせていただいております。また、討論参加者としてご参加いただいております方も、専門は異にしつつも、それぞれ今日の主題に関して、独自のご意見をおもちの方々ばかりであります。そのほかの一般参加者も含めて、会場全体から活発な論議がまき起こることを期待しております。

このシンポジウムにおいて、なんんかの発表者によって主題的に扱われるはずの中江兆民は、1886年（明治19年）の翻訳書「理学沿革史」のなかで、こう書いております。

或ハ問ヒ或ハ答ヘテ以テ道理ヲ求ムル者、是正ニ学者ノ業ニ非ズ乎、夫レ道理ナル者ハ衆意思相触ル、ノ間ニ爆発スル者ナリ。

兆民のいうこの「道理」の「爆発」を、皆さまとともに、期待しようではありませんか。

国際高等研究所は、これまでに、自然科学と人文科学との接点にあたる国際シンポジウムとして、1989年に東京で「音楽と情報科学」を開催しております（組織委員長猪瀬博氏、副委員長村上陽一郎氏）。しかし、純粋に人文科学の領域のシンポジウムは、今回が最初であります。さらにまた、参加者全体が開催地である日本のことばだけを使用する、本高等研究所最初の国際シンポジウムでもあります。なお私たちの今回のシンポジウムは、本年9月、今回の発表者でもある大橋良介氏を責任者として組織されるもうひとつのシンポジウム「文化の翻訳可能性——ひとつの文化は、別の文化に翻訳可能であるか？」へと接続する予定であります。

私は、国際高等研究所の企画委員として、いわば研究所内の人間であり、そういう立場にある人間が、研究所内部の方々に、感謝を表明するのは、いささか異例である、とお思いの方もいらっしゃるかもしれません。しかし、今回のような純人文科学系の国際シンポジウムが国際高等研究所によって開催されるにいたりましたのは、奥田東理事長、ただいまご挨拶をいただきました岡本道雄所長、ならびに福井三郎企画委員長のご理解とご尽力のおかげであります。この場で厚くお礼を申しのべさせていただきます。さらに、事務的連絡、会場設営等一切がとどこおりなく進行いたしましたのは、事務局長熊坂誠さんはじめ、事務局の極めて有能な課長草木良子さんと、その協力者松井麻里さん、および井上香織さんの献身的なご努力のたまものであります。参加者一同の名前で、事務局長、ならびにこのお三方に厚くお礼を申し上げます。